

鵜川河口干潟の保全と再生への取り組みについて

北海道開発局 室蘭開発建設部 治水課 谷口 清

1 鵜川河口の現状について

鵜川は、その源を北海道勇払郡占冠村の狩振岳に発し、穂別町の市街地を流れ、鵜川町にて太平洋に注ぐ流路延長 135 km、流域面積 1,270 km²の一級河川で、河口の干潟は日本有数のシギ・チドリ等を中心とした渡り鳥の中継基地として全国の野鳥愛好家に古くから知られ、多くの渡り鳥が休息・採餌場として飛来していた。

しかしながら、鵜川河口は昭和 50 年代以降の海岸浸食等により河口干潟は年々減少しつつあり、現在は左岸の一部に僅かに存在するのみで、渡り鳥の中継基地としての機能は年々低下している状況にある。また、左岸にある堤防も海岸侵食の影響が懸念されていた。



写真 - 1 鵜川河口のS53年とH11年の空撮比較

2 地域住民との鵜川河口干潟の保全と再生に対する取り組み概要

このような背景を踏まえ、治水対策や干潟保全といった鵜川の河口部における諸課題について、河川管理者と地域団体等とが連携して取り組みを進めていくための第1歩として、北海道開発局室蘭開発建設部の呼びかけにより、鵜川町役場関係者、鵜川漁業協同組合、鵜川で自然保護活動をしている各団体、および鳥類の専門家等、地域を中心とした各分野の方々からなる「鵜川河口に関する懇談会」を平成8年10月22日に発足させた。



写真 - 2 第10回 懇談会の様子

懇談会は、平成12年3月9日までに11回開催し、「海岸保全対策工の実施」「河川行政と町民の環境改善活動との連携」活動を行っていき組織のあり方」等について提言をまとめた。これを踏まえて、懇談会に携わった地域住民の方々の連名で北海道開発局室蘭開発建設部に鵜川河口干潟の再生と保全についての要望書が提出された。

懇談会は発展的に解消し、懇談会での提案や意見等を現実のものへと実行していく新たな組織として「わくわくワーク・むかわ」が発足した。「わくわくワーク・むかわ」は、懇談会のメンバーや、鵜川をフィールドとして活動している自然愛好家、鵜川に関心を持つ方々等、地元の方々が中心となって自主的に立ち

上げられた会で、学識者を招き、干潟に関する勉強会を催す等の活動を行っており、北海道開発局室蘭開発建設部としてもこの勉強会に参加し、意見交換を行いながら鵜川河口干潟の再生と保全の事業を進めている。

2.1 鵜川河口懇談会における取り組み内容

「鵜川河口に関する懇談会」は行政が呼びかけを行い進めたが、行政側から河口干潟の将来像を一方向的に示すことをせず、白紙の状態に懇談会に望んだ。懇談会では机上で意見交換を行う他に、学識者を招いた講演会(鵜川河口の環境を考える講演会)を開催したり、住民、学識者、行政が一緒になって現地見学を行いながら意見交換を行うなどの試みを行

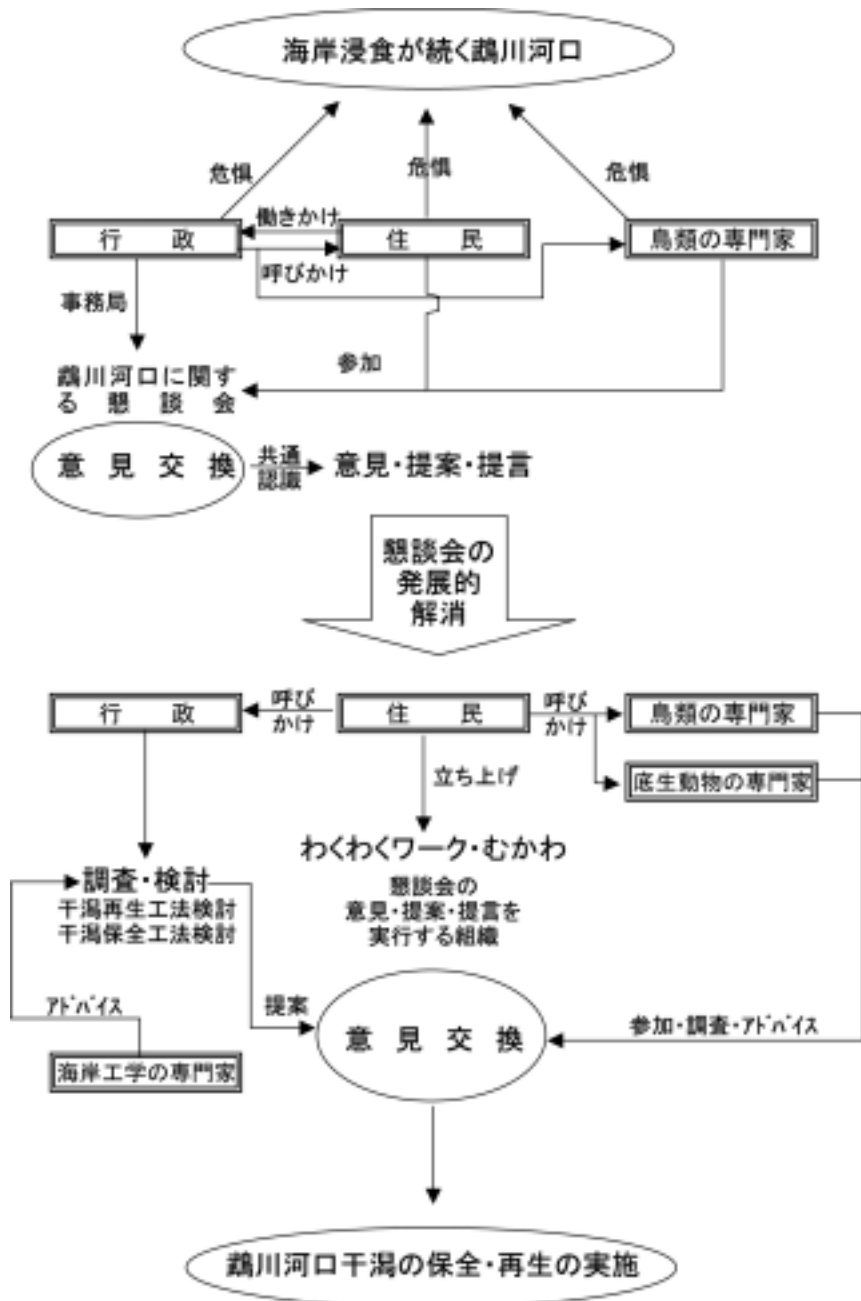


図 - 1 鵜川河口干潟の保全と再生の取り組み概要図

った。これらの活動を通じ、住民と行政は
鷗川の河口干潟に対する現状や課題等につ
いて共通の認識を持つことができ、各自が
責任を持って取り組むべき方向性が取りま
とめられ、鷗川河口干潟の保全と再生に向
けて動き出した。

2.2 干潟再生に向けた取り組み内容

鷗川河口干潟の保全と再生は大きく2つ
の対策から成り立っている。

大部分が消失した干潟の再生。

激しい海岸侵食を防止し、残された
干潟及び再生した干潟を海岸侵食か
ら守る河口部保全。

また、干潟の保全・再生というこれまで
に前例がない事業を進めるに当たっては、
具体的工法等を検討する段階で広く意見を
聞き、工事は様子を見ながら少しずつ進め
ることとした。

まず、干潟を再生するにあたり行政が平
成13年3月に現地に干潟試験地を造成し、
望ましい干潟の機能を把握するため、干潟
の物理環境や底生生物の生息環境等の調
査を行うこととした。この段階で「わくわ
くワーク・むかわ」が主体となり鳥類の
専門家や底生動物の学識者を招き、干潟
試験地から得られる各データを基に、か
つての様にシギ・チドリ類の餌となる底
生動物（ゴカイ）が多く住みつくことが
できる干潟を再生す

るための勉強会を主催した。行政もこれに参加し、数回の意見交換を経て、平成15年3



写真 - 3 講演会の様子（鷗川町にて）



写真 - 4 勉強会の様子（鷗川町にて）



写真 - 5 再生した干潟（H15年7月29日撮影）

月に約2.8haの干潟を再生するに至った。

干潟再生工事中は行政側から「わくわくワーク・むかわ」で活動されている方々に工事中の様子をメールによって情報を発信する試みを行い、行政と住民における情報の共有化を図った。

一方、「わくわくワーク・むかわ」では、鷗川河口の自然環境を育む活動の他に、生物環境にとっての干潟の重要性や干潟再生への取り組みを広く一般住民に情報

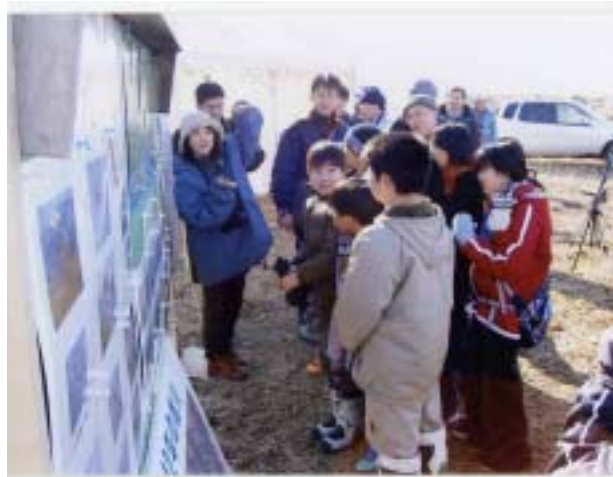


写真 - 6 工事見学会の様子

発信するため、工事見学会の主催や河川整備基金の助成を受けて環境副読本を作るなど、自分たちが出来る範囲で活動の輪を広げている。なお、干潟保全対策工については現在、調査検討中であるが、同様な手法を用いて対策工を選定していく予定である。

3 まとめ

ある目的に向かって(本件では消失した干潟の再生と保全)その目的を達成するための方向性をまとめる意思決定段階や計画立案段階において、住民、学識者、行政が意見交換を行い、お互いが共通認識を持つことにより、各自が取り組むべき事項が明確になるとともに責任意識が芽生え、地道ではあるが着実に住民・学識者・行政が一体となった事業展開を図ることが可能と考える。

ただし本件と違い、主要な論点において行政と住民が対立してしまっている事業に対して、途中段階から本件と同様な手法を適用することが可能なのか。また、どの様なタイミングで導入するのが良いのか等については今後の検討課題と考える。



図 - 2 鷗川河口干潟におけるパートナーシップ図